

越日外交関係を古書籍に探る

グエン・テイ・オワイン

はじめに

ベトナム・日本・朝鮮半島は中国文化の影響を色濃く受けた国々である。話し言葉は異なるが三カ国とも記録を残すツールとして漢字を用いるので、中国を源とする漢字文化を摂取した歴史を共有している。中国思想（儒教・仏教・老子思想）を取り入れる上で、各国とも儒教を主たる思想系統として受容した。現在、朝鮮半島とベトナムでは漢字を使用していないが、両国とも漢字文化という揺り籠の中で長い歴史を紡ぎ続けている。そのような時間と空間の中で朝鮮半島・日本・ベトナムは多岐にわたる直接的な交流を重ねてきた。

ベトナム・日本・朝鮮半島は、これまでの中国との長期にわたる関係とは別に、中世において文化や経済面で双方向の交流を深めてきた。ベトナムと日本、またはベトナムと朝鮮半島の直接的な交流は順調に推移したわけではないが、二国間関係には顕著な軌跡を見て取ることができる。「山川風域雖云異、禮樂衣官是則同（山や川、そして風俗は違うけれども典礼や官吏の装束には共通点がある）」は、1597年に琉球から派遣された使者が帰国するにあたってフン・カック・ホアン（Phùng Khắc Khoan、馮克寛、1528～1613）が見送る際に詠んだ『達琉球国使』という詩の中の二行である。「山河應有異、翰墨自相同（山や川は違うけれども文章は元はといえば同じである）」は、韓国国王の使者南廷順が作った詩の二行で、1864年北京でベトナム国王の使者グエン・トゥー・ザン（Nguyễn Tư Giản、阮思間）の詩への返歌である。これは、ベトナム国王の使者が漢字文化圏内の他の国々と外交関係を結んでいたことを証明することになる。

ベトナムと漢字文化圏の国々との国交関係に関して、国内外の研究者たちが論文や研究を残してきた。にもかかわらず1000年にもわたる国交の歴史の厚みに比べると、この分野でのベトナム研究業績はまだまだ貧弱と言わざるを得ない。最近では、ベトナムと当該地域の国々とが交流し研究協力を盛んに行ってきたおかげで、国内外の専門家たちが調査した資料を元に、かつては同文の範疇であったベトナムとの外交関係がより明確になってきている。このような国内外の専門家の方々にさらに情報を提供できるよう近年のベトナムと日本の関係についての研究動向を整理し、歴史上の両国関係に関する新しい資料をいくつか提示することとする。当論文の紙数には限りがあるので、漢喃研究院に現在所蔵されている資料の中でベトナムと日

本の国交に主に関連がある研究や論文を概説することにとどめる。

この論文が歴史上の両国国交関係に関する新たな理解の一助となり、この分野での研究者同士の交流と協力がさらに発展する一資料になればと期待している。

1. 両国の外交的接触

ベトナムと日本の関係の研究調査を進めていく上で、国内外の研究者たちは通常中国・朝鮮・日本にある一次資料を使用する。ベトナムでの一次資料といえば、「大越史記全書」「大越史記續編」「大南寔録」「欽定越史通鑑綱目」などのベトナム正史の書物になる。これらの書物には、中国との国交上の様々な事件を除くと、外交について言及した情報、とりわけ中世に東アジアと東南アジアを結ぶ重要な経済の中心地であった日本の南にある琉球諸島との関係についての記述は極めて少ないのが事実である。しかしベトナムと日本に関わる資料のいくつかが日本や外国の研究者たちによって最近になって公開されたことで、ベトナム研究者はこの問題に関してさらに新たな認識を持つ契機となった。そこで国内外の研究者たちが公開した資料を時系列に沿って整理してみることにする。

日本・中国・ベトナムの資料によると、唐の時代に日本人として初めてベトナムで公的な職位に就いた人物は阿倍仲麻呂（中国名は晁衡。朝衡とも書く）である。黎則の『安南志略』（図1）には、阿倍仲麻呂¹について以下の通り、記されている。「朝衡は日本人である。開元年号中、幣をもって、唐朝に来た。中華の風を慕い、因って留りて、姓名を改めて朝衡と為した。使を遣わして来朝したことがある³。永泰年

1 『安南志略』、ハンノム研究所所蔵、記号 A. 16、黎則によって、元統元年（1333）に序文が書かれている。程鉅夫、元明善、趙銖、劉必達、許善勝、許有壬、果原夏鎮、復翁、彦吟香が序文を書いている。甲申、明治17年号（1884年）に彦吟香によって編集された。樂善堂（上海印行）『漢・喃遺産——提要目録』。

2 中国の『唐列伝』『旧唐書』『新唐書』などと日本の『土左日記』『今昔物語集』によると、阿部仲麻呂は698年孝元天皇の家系に属する家で生まれ、奈良時代に留学のため唐に渡り科挙試験に合格し官吏として働いた。阿倍は学問に大変秀でていたため唐玄宗王に寵愛され、朝廷では文学を管理する職に長く就いていた。当時阿倍は唐代で有名な詩人たち——李白、王維——と頻繁に会い友誼を深めた。当時の阿倍の詩は現在『全唐詩』の中に所収されている。阿部は帰国の道が断たれてしまったため中国に50年以上住み続け唐玄宗王の依頼で唐朝の官吏としてその職をまっとうした。761年阿倍はベトナムに渡り安南節度使として総督の職に就いた。761年から767年の間阿部はハノイの安南都護府で仕事をした後、日本へ帰国し770年に72歳で亡くなった。国際日本文化研究センターの荒木浩「阿部仲麻呂の事件が記録された阿倍仲麻呂帰朝伝説のゆくえ——『新唐書』と『今昔物語集』そして『土左日記』へ」を参照。

3 この部分、原文も短く、意味が曖昧である。『唐書』『新唐書』では日本から中国に新たな遣唐使が来た、ということを伝えているが、『唐書』は別の使いが来たといい、『新唐書』は仲麻呂がふたたび入朝したと書いている。記述が揺れている部分なので、注意が必要。

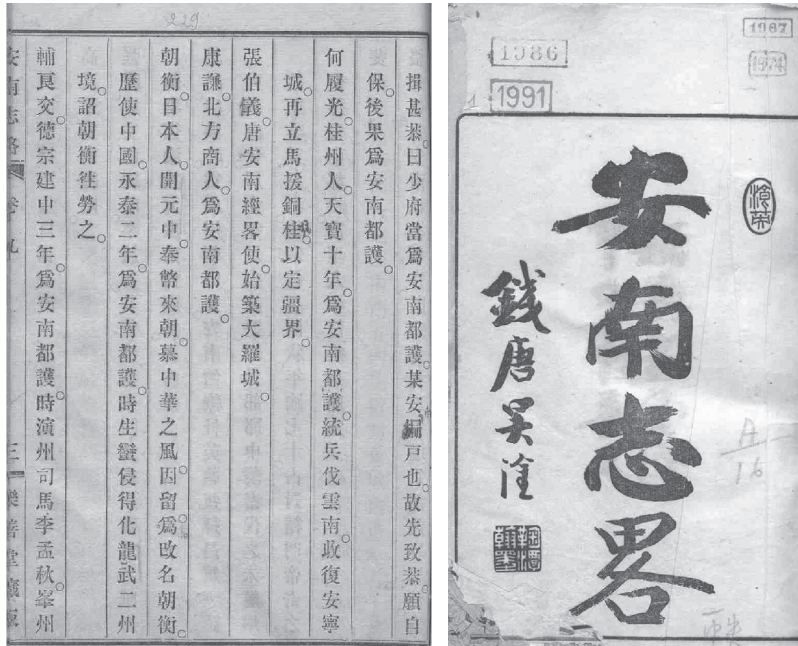


図1 『安南志略』（図書番号：A.16、ハンノム研究所）

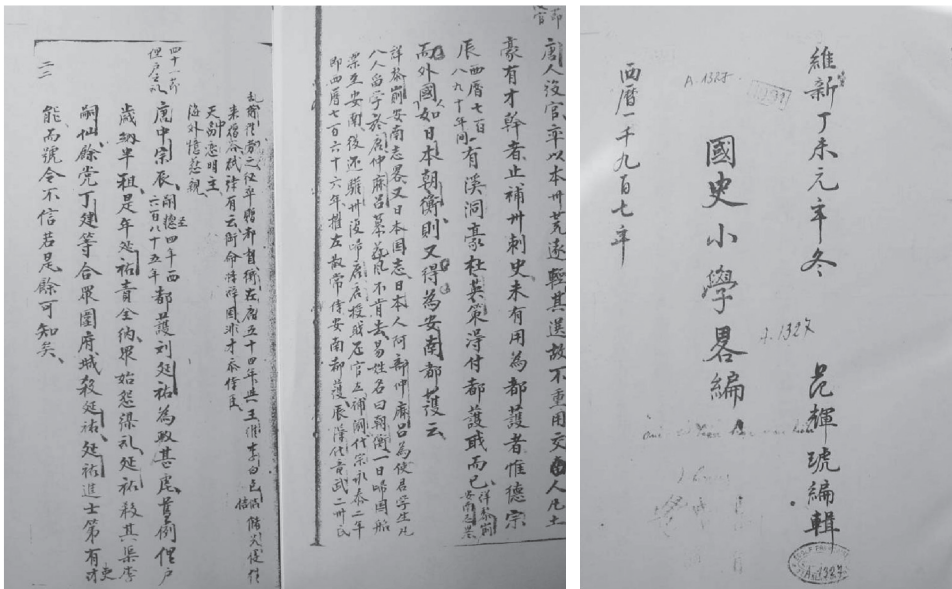


図2 『国史小学略編』（図書番号：A.1327）

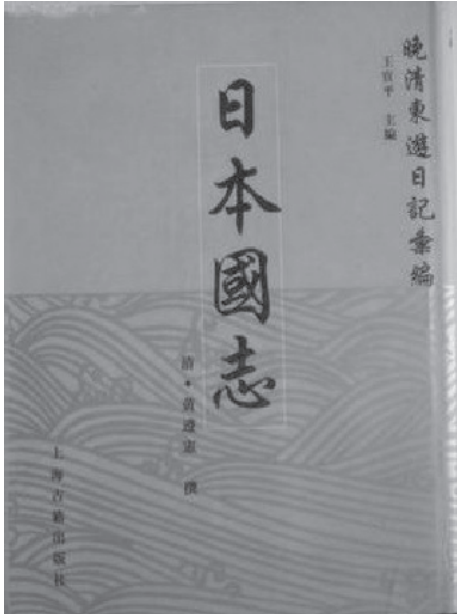


図3 『日本国志』

二年、安南都護となす。当時、蛮人が清化と龍武の二州の境へ侵犯した為、朝衡が詔を奉じて、慰勞した」。

原文：「朝衡日本人。開元中、奉幣来朝。慕中華之風、因留為改名朝衡。歴使中国。永泰二年、為安南都護。時、生蛮侵得化龍武二州境、詔朝衡往勞之」（『安南志略』）。

存知のように、1907年にファン・フィ・ホー（Phạm Huy Hồ）氏によって編纂された『国史小学略編』⁴（図2）（図書番号：A. 1327、抄本、ハンノム研究所）の中にも阿倍仲麻呂について言及がある。阿部仲麻呂に関する記述は『安南志略』と中国の『日本国志』（図3）から取り上げたものである。本書は阿倍仲麻呂についてもっと詳しく書いている。

黎崱の『安南志略』と『日本国志』によると、日本人の阿倍仲麻呂は使者として、留学生の8人と一緒に唐に留学した。阿倍仲麻呂は中華の風を慕い帰国せず、姓名を改めて朝衡となした。ある日、阿倍仲麻呂が乗った帰国船が安南に流され、後に、また驩州に行き、唐へ戻る。唐で官職を受けて、左補闕などの官職を持つ。代宗の永泰二年、すなわち西暦766年、左散常侍と安南都護となす。当時、蛮人が清化と龍武の二州の境を侵す。朝衡は詔を奉じ、慰勞した。没した後、都督を賜った。朝衡は唐に54年間在住した。王維、李白、包佶、儲光羲と交流し、詩を贈答する。「衡命将辞国、非才忝侍臣、天中恋明主、海外憶慈親」⁵と詩を贈る。

今まで阿部仲麻呂について唯一の資料として知られていた『安南志略』以外に、グエン・フィ・ホー氏の『国史小学略編』もあるということがわかった。阿部仲麻呂について研究するにあたって非常に少ない資料を補充するものになるだろうと期

4 『国史小学略編』 図書番号：A. 1327、抄本、ハンノム研究所。

5 この詩は一部しか取り上げていない。『唐列伝』によると、この詩は朝衡が作った詩である。原文は以下の通りである。「衡性好學，能詩賦。當是時，名士如李白、王維等，多友之。天保中，遣唐大使藤原清河至唐，上命接之。及清河還，以思鄉故，衡亦奏稱欲歸。上許之，因命為使。王維、包佶、趙驊等，皆作詩相送。衡亦賦律詩曰：「衡命將辭國，非才忝侍臣。天中戀明主，海外憶慈親。伏奏違金闕，駢驂去玉律。蓬萊鄉路遠，落木故園林。西望懷恩日，東歸感義辰。平生一寶劍，留贈結交人。既而至明州，與唐人別。衡望月，悵然詠和歌曰。「天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山にいでし月かも」。

待している。

日本人の阿倍仲麻呂がベトナムで職に就いたことは、ベトナムと日本の国交関係を証明することにはならないが、政治的職務に就いた日本人とベトナム人の接触が外国の歴史書に初めて記された事例と見ることができるであろう。

ベトナムは10世紀に中国の支配から抜け出し14世紀まで独立を保ったが、大越国建国の時期には『大越史記全書』や『大越史記前編』などのベトナム正史が編纂された。しかしこれらの書物の中にはベトナムと日本の外交関係について記した資料は一切見当たらない。ただし、各国の商船が各地の産物を貢納し物資を売買できるようリー・アイン・トン（Lý Anh Tông、李英宗、1138～1175）王が1149年にヴァンドン（Vân Đồn、雲屯）に莊園を開いたことは、『大越史記全書』に記されている。ここから当時の李朝

が積極的な経済政策を推し進め幅広い海外ビジネスを提唱したことがわかる。金武正紀の論文「琉球王国の東南アジア交易と沖縄で発見されたベトナムの陶磁器」によれば、琉球の各遺跡で李朝や陳朝時代の陶器が多数出土したとのことである。これは、中国の商船のほかに東南アジア・琉球王国・日本の船もヴァンドンやベトナム各地の港で交易を行っていた可能性が高いことを示唆している。

陳王朝の時代には、越・日の交流と貿易について新しい資料は見つからない、モンゴル襲来に対する軍事戦略についての越・日の両国に関する資料が知られている。最近、社会科学通信図書館が所蔵している中国語のテキスト『欽定通鑑輯要』（図4）（嘉慶庚申重鐫、江寧布政使司衙門藏板）の巻95に丙戌（1286）年にモンゴルがベトナムの侵略に集中して注力するために日本を攻めることをやめてしまったという記



図4 『欽定通鑑輯要』
（社会科学通信図書館。図書番号:149/24）

- 6 『大越史記全書』の本紀第4巻（李〔Ly〕朝時代の己巳の年、大定第10年〔1149〕）には「春24月にジャワ・路洛・シャムの三カ国の商船が高級品の売買と特産物の上納のため逗留しヴァンドン（Vân Đồn）と呼ばれる島で店を出す申請をした」（社会科学出版、ハノイ 第1集、1988年、317頁）（春二月瓜哇，路洛，暹羅三國商舶入海東乞居晝住販賣乃於海島等等處立庄名雲屯買賣寶化，上進方物〔大越史記全書、巻4、6b頁〕）。
- 7 金武正紀「琉球王国の東南アジア交易と沖縄で発見されたベトナム陶磁器」（1999年12月にハノイで開催された昭和大学国際文化研究院とハノイ国家大学主催による「陶磁器交流を通して見る15～17世紀の越日関係」科学シンポジウム紀要）。

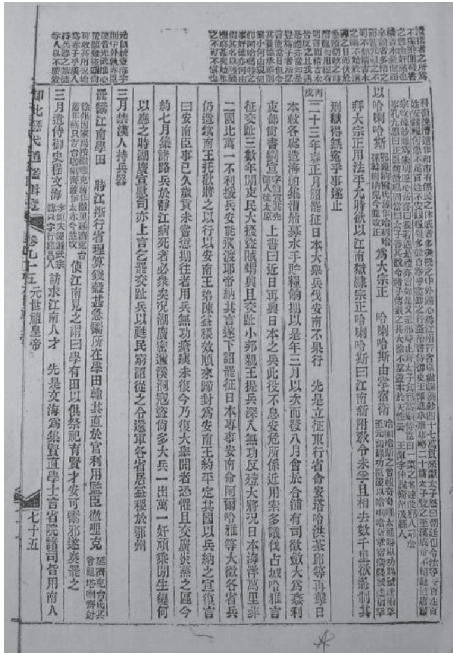


図5 『御批歴代通鑑輯覽』(大阪大学)

事が存在することがわかったが、この記事は目録だけが残っており、巻95そのものは現存しない。しかし、中国と日本の友人のおかげで、『御批歴代通鑑輯覽』(図5)(出版年:光緒24年[1898])と『四庫全書』の『御批歴代通鑑輯覽』(62頁)(図6)が手に入った。巻95の元世祖皇帝紀(75葉表)の中にその記事があった。

また、中国の資料以外では、ベトナムの呉時仕『大越史記前編』(図7)、巻5(69葉裏)¹⁰ 3陳仁宗紀に、元朝が日本襲撃をやめて、大軍で南国(ベトナム)を攻めたという記事が見られる。以上の二つの資料は大変貴重な資料である。当時の元政権がどのように隣国を侵略する戦略・策略を策定するかを正確に示す資料である。また、両国のモンゴル襲来の歴史について、両国の研究者が手に入れていない興味深い資料を提供している。

16世紀から17世紀にかけての越日関係については、海外の研究者たちが最近の論文の中で言及している。例えばヴィン・シン(Vinh Sinh)教授による「16世紀初頭に琉球王国がベトナムに宛てた書簡」¹¹では、次のような1509年の史実を明らかにしている。すなわち、琉球王国の中山王が正使として正議大夫鄭久、副使として馬沙開、通事としてテイコら130名を派遣して、贈り物や国書を安南国王に献上したという史実である¹²(図8)。

山辺進氏(二松学舎大学)は「日本における漢字の受容過程と使用の特徴」¹³の中で、「安南国王への返事」と呼ばれる漢字で書かれた書簡を用いて、16世紀半ばにおけるベトナムと日本の交流の状況について言及している。この手紙は天皇の指示によって書かれたもので、安南国王が九州の島津家に友誼の申し入れをしたことに島

8 『四庫全書』の『御批歴代通鑑輯覽』。大阪大学人文学院の吉川一樹により寄贈された。

9 『四庫全書』の『御批歴代通鑑輯覽』。北京大学の張龍味により、寄贈された。

10 『大越史記前編』(社会科学出版社、1997年、371頁)。

11 ヴィン・シン(Vinh Sinh)「16世紀初頭にベトナムに宛てた琉球王国の書簡」(雑誌『昔日と今日』第134号、2003年2月)。

12 『歴代宝案』(沖縄県教育会出版社、1992年、597頁)。

13 山辺進「日本における漢字の受容過程と使用に関する特徴」(雑誌『ハンノム』第6号、2008年)。

以哈喇哈斯 <small>鄂羅納爾氏舊作哈刺哈孫幹刺納兒今改</small> 為大宗正	哈喇哈斯由掌宿衛 <small>哈刺哈斯之曾祖奇哩太祖功臣後以哈刺哈斯時以功賜號達爾罕至元初錄掌宿衛襲達爾罕</small> 拜大宗正用法平允時欲以江南獄隸宗正哈喇哈斯曰江南新附教令未孚且相去數千里欲遙制其刑獄得無冤乎事遂止	丙戌二十三年春正月詔罷征日本大舉兵伐安南不果	行	先是立征東行省命安塔哈洪察球爾再擊日本敕各處造海船集漕船募水手貯糧餉期以是年三月以次而發八月會于合浦有司徵歛大為姦利吏部尚書劉宣 <small>字伯宣其先潯人徙太原</small> 上書言近日再興日本之兵此役不息安危所係近用索多議佔占城阿爾哈雅言征交趾數年吏民大擾盜賊蝟興且交趾小邦親王提兵深入無功反殪大將况日本海洋萬里非二國比萬一不利援兵安能飛渡邪帝納其言遂令詔罷征日本專事安南命阿爾哈雅等大徵各省兵仍
---	--	------------------------	---	--

図6 『御批歴代通鑑輯覽』(北京大学)

信矣、
丙戌重興二年元三十二年春正月、放元軍還國。○二月、元使合撒兒海牙來。○三月、元詔大舉來侵不果行。元脫羅敗賊。元王大憤、令罷征日本。兵悉師而南、命湖廣造船三百艘、期以八月會歛廣州。又命江、湘、湖、廣、江西三行省會兵兩院、封陳益發為安南國王、秀巖為輔義公、以兵納之還國。其尚書劉宣諫以為安南用兵功、功瘡痍未復、今議大舉、約以七月集兵、炎蒸之區、病死者必眾矣。湖南省臣綠幕亦上言、連歲用兵、士卒多死、傷四民產

大越史記本紀卷之五
陳紀
太宗皇帝姓諱熈初諱燕受昭皇帝在位三十三年遷位十九年壽六十歲聖明煥然可述密覲書國事皆陳守度所為三綱不正闕門備德多矣
帝之先世、閩人四世祖京、來居天長、即墨生、僉翁生、本生、承世、以漁為業、帝乃昉之、次子也、母劉氏、以李建嘉八年戊辰生、隆準龍顏、儀采秀偉、年八歲為李朝祇、應得祇、假正從叔子、更壽安前、甘軍、因得人侍宮中、遂

図7 『大越史記前編』(図書番号:A.2/1-7)

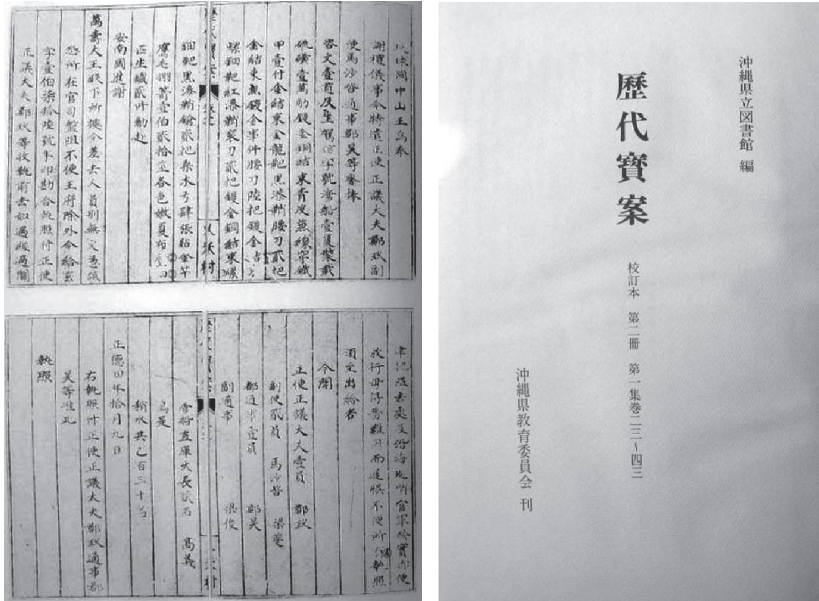


図8 『歴代寶案』(沖縄大学)

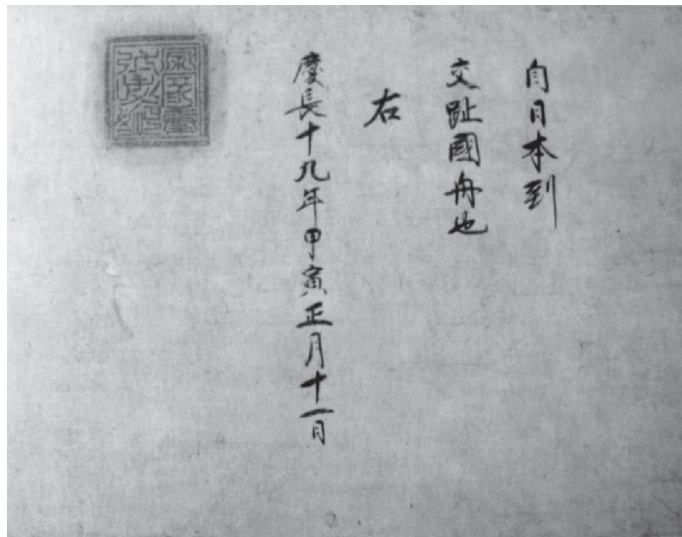


図9 異国渡海朱印状(九州博物館)

津家が同意する旨が記されている。この書簡には「安南布政州右奇副將北均都督同知華郡公」という見出しがついており、文中に「都元帥總國政尚文平安王」(1570～1620年にかけて在位した平安王鄭松を指す)の名前が繰り返し出てくる。この手紙を書いたのは文之玄昌(1555～1620)という学者であり、島津家に仕える臨濟宗の僧侶兼藩の外交相談役であった。

以上の二通の手紙から、琉球や九州以外の地域も16世紀からベトナムとなら

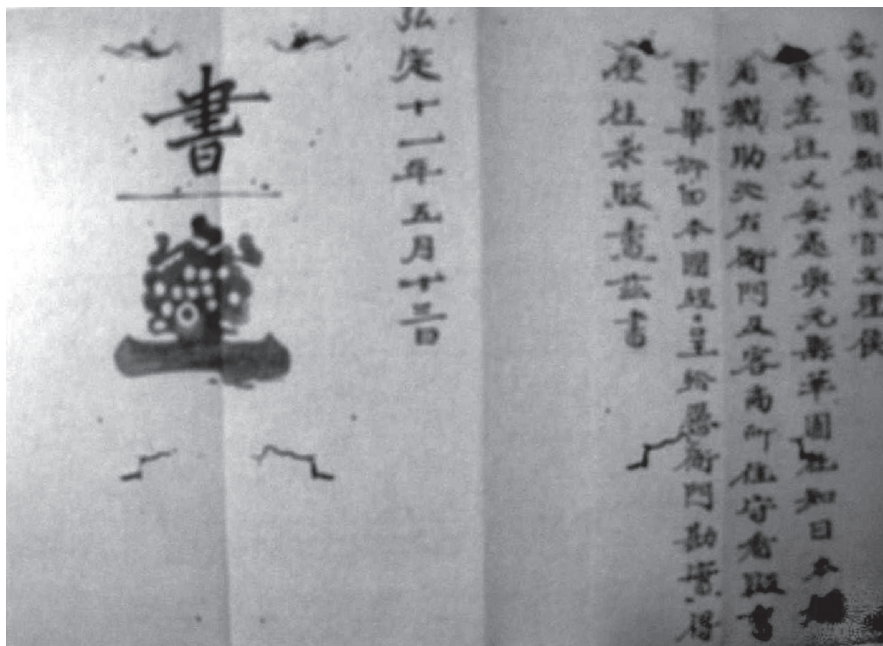


図10 安南国文理侯書簡写（九州博物館）

かとの関係があったのではないかと推測することができる。また、日本から申し入れるのではなく、ベトナムの陳朝政権の側から率先して外交関係を結んだ事例があったことも付け加えておく。

最近、2013年4月、九州国立博物館でベトナムについて大規模な展覧会が行われた。『The Great Story of Vietnam——大ベトナム展カタログ ベトナム物語』¹⁴の中に藤田励夫氏の「外交文書にみる16～17世紀の日越交流」という論文がある。本論では日越外交文書研究について概観した上で、安南国副都堂福義侯阮書簡などを紹介し、中・南部の阮氏と北部の鄭氏と占城の通交などについて述べている。カタログの中には、4枚の異国渡海朱印状（図9）と、1591年、1609年、1610年（2通）、1611年、1620年、1624年（2通）、1632年（2通）、合計10通がある。10通のうち、1620年の書簡を以下の通り翻訳する（図10）。

安南国都堂官文理侯奉差父安処興元県華園社、知日本船角蔵助次右衛門及客商所往守看販売、事畢許回本国、経呈給憑、衙門勘実得便往来販売。茲書
弘定十一年五月十三日

14 『The Great Story Vietnam——大ベトナム展公式カタログ ベトナム物語』（西日本新聞社、2013年）。

安南国の都堂官の文理侯が父安処興元県華園社へ部下を派遣した。そこでは、日本船の角倉助次右衛門ら外国商人が常に売買を行い、交易を終えたら日本へ帰れるよう許可がほしい。証明書を発行するので、担当の役所は実際に検査して、往来と商売に便宜をはかってもらいたい。茲書

弘定十一年五月十三日

最近、存知のように、『南風雑誌』(図 11) 54 号に楚狂黎余の論文「古代南日交通攷」(古代のベトナムと日本との交流について考察する)(挿絵 11) が載った。本論では日越外交文書研究について概観し、^{グエン}阮王朝初期(阮黄と福元)の阮氏、黎朝の黎氏、^{チン}鄭朝の鄭氏と日本との交流について述べているが、そのほかに、阮氏と黎氏と鄭氏が日本へ送った 18 通の手紙(書簡)と、日本から阮・黎・鄭の政権へ送った 5 通の書簡という重要な資料を紹介している。

『異国往来日記』『外藩通書』『古事類苑』、日本の資料、長崎の荒木宗太郎所蔵のものなどから掘り当てた書簡であった。『南風雑誌』にあるベトナムからの書簡は全部で 18 通あるが、内訳は以下の通りである。阮氏が送った書簡は 1601 年・1603 年・1604 年・1605 年・1606 年・1619 年・1628 年、黎氏が送った書簡は 1613 年・1634 年(2 通)、鄭氏が日本へ送った手紙(書簡)は 1610 年(4 通)、1611 年・1624 年(2 通)、1694 年(1 通)。また、日本の当時の政権がベトナムの阮氏・黎氏・鄭氏へ送った書簡は 1601 年・1602 年・1603 年・1605 年(年号無し)の 5 通である。以上の『南風雑誌』にある 18 通の書簡の中にある都堂官の文理侯の書簡(1620 年)は九州博物館のカタログにも見られる。

楚狂黎余は、初めて両国の書簡を多数紹介し『南風雑誌』に掲載した。だが、残念ながら、今までベトナム語に翻訳されていない。近いうちに黎余の論文を皆に紹介したい。

海外の研究者の研究や論文からはもちろんのこと、ベトナムの様々な歴史書の記述からも、16 世紀末におけるベトナムと日本の関係についてさらに明確に知ることができる。例えば『大南実録前編』には以下の史実が記されている。

乙酉二十八年時西洋國賊帥號顯貴者，顯貴乃番酋所推尚，以為號非人名乘巨舟五艘泊于越海口劫掠沿海。上命皇六子領戰船十餘艘直抵海口擊破戰船。二船顯貴驚走(第 A. 27/1-66 [VHN] 号、訳者註：この番号はハンノム研究院の書庫における当該文献の番号を表している。以下同様。第 1 卷 13b から 14a 枚目)

乙酉 28 年 [1585] の 3 月に顯貴という西洋の賊将 [顯貴とは蛮族の酋長の別名で人名ではない] が沿岸部を襲撃するために大型船 5 隻でやってきてベトナムの港に停留した。領主は直ちに第 6 王子に 10 隻以上の船を与え港に差し向けた。

王子は2隻を撃破した。顯貴は恐れをなして逃走した。¹⁵

川本邦衛教授は『古都ホイアン』¹⁶に掲載された論文「外藩通書から見るクアンナムのグエン領主の国際認識」の中で、顯貴は白濱顯貴であると指摘している。グエン・ホアン (Nguyễn Hoàng) 領主は、1601年に徳川家康将軍に宛てた手紙の中でこの事件について触れ、「顯貴が優良なる商人であることを知らず残念なことになってしまった。日本側は是非この件を水に流してダンジョン [Đàng Trong、訳者註：グエン氏が支配したザイン川以南の地域] へ引き続き朱印船を派遣してほしい」と書いている。この書簡は『外藩通書』の中に収められている。『外藩通書』は現在日本に残っており、江戸時代の日本の国際関係を知る上で大変重要な歴史資料である。鄭領主や阮領主が1601年から1694年の間に徳川幕府に送った56通の書簡の中に収められている。安南国王が島津家久に友誼を申し入れた手紙はこの56通のうちの一通ではないかと思われる。¹⁷

前述したが、1509年に琉球の使節団がベトナムにやって来た後、つまり莫朝から黎朝に政権が代わる1527年から1592年にかけてのベトナムと日本の国交については、現存する歴史書や資料に記述がない。しかし莫朝は引き続き交易を推し進めいくつかの港を建設しているの、16世紀から17世紀にかけてはベトナム対外経済の繁栄期と見なされている。また首里王府が17世紀から19世紀にかけて編纂した琉球王国の外交活動を記録した『歴代宝案』には、1509年に1回だけベトナムに寄港したことが記されている。ところが『明史』や『皇明寔録』などの中国の歴史書によると、琉球王国は中国へ171隻、安南へ89隻、ジャワに37隻、日本に19隻の商船を派遣したことになる。¹⁸『明史』に書かれている船舶数が正しい

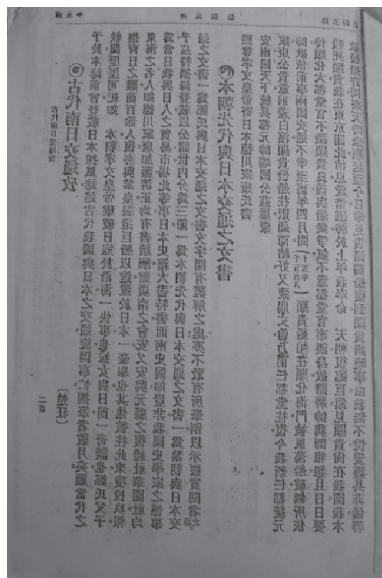


図11 『南風雜誌』：本朝先代与日本交通之文書

15 『大南実録前編』（教育出版、2004年、ハノイ、第1巻、32頁 [A. 27/1-66VHN]）。

16 『古都ホイアン (Hội An)』社会科学出版、ハノイ、1991年、171頁。川本邦衛『「外藩通書」から見るクアンナム (Quảng Nam) におけるグエン領主の国際認識』。

17 実はグエン・ホアン (Nguyễn Hoàng) が1601年に将軍徳川家康に宛てた手紙については、楚狂黎余によって『南風雜誌』(54号、200頁)に掲載されている。本論には『大南実録前編』における白濱顯貴に関する記録も引用している (201頁)。

18 グエン・ヴァン・キム (Nguyễn Văn Kim) 『日本とアジア——社会経済の歴史的関係とその変遷』(国家大学出版会、2004年)、160～170頁。

とすれば、琉球船の寄航先として安南が中国に次いで二番目に多いことになり、琉球にとってベトナムはアジアの中で中国に次ぐ大きな可能性を秘めていた交易相手国であった。

莫朝が王権から退いてからも、海外との交易活動は黎朝・鄭朝政権によって引き続き行われ、中国からの支援を取り付けるために黎朝は自ら北京へ使節を送った。現存する資料によると、光興 20 年（1597）にはフン・カック・ホアン（Phùng Khắc Khoan、馮克寬¹⁹、1528～1613）が北京に赴いた際に朝鮮と琉球の各使節と遭遇している。フン・カック・ホアンは『使華筆手澤詩』（第 A. 2011〔VHN〕号）の中に、帰国の途につく琉球の使者を見送った時に詠んだ詩「達琉球國使」²⁰を収めている。この詩は、フン・カック・ホアンや 16 世紀から 18 世紀にかけての琉球王国と大越国の関係に関する研究論文の中でベトナム研究者たちが紹介している²¹。

19 フン・カック・ホアン（Phùng Khắc Khoan、馮克寬〔1528～1613〕）はハータイ（Hà Tây）省（現在のハノイ）タックタット（Thạch Thất）郡フンサー（Phùng Xá）村出身。レーテートン（Lê Thế Tông、黎世宗）王の時代、庚辰の年光興 13 年（1580）に第二甲進士合格後、戸部尚書と国子監祭酒を兼任する。マイ・クアン・コン（Mai Quân Công、梅郡公爵）。国王の命を受けた使節として明に二度渡航。多くの著作を残し、逝去時には太宰の称号を受けた（チャン・レー・サン〔Trần Lê Sáng〕『フン・カック・ホアン——その人生と詩文』ハノイ出版、1985 年、234 頁を参照のこと）。また、チン・カック・マン（Trịnh Khắc Mạnh）氏の『ベトナムハンノム作家の假名と別名』（通信文化出版、2007 年）を参照のこと。

20 達 琉 球 國 使

日 表 紅 光 照 日 隅
 海 天 南 接 海 天 東
 山 川 封 域 雖 云 異
 禮 樂 衣 冠 是 則 同
 偶 合 夤 緣 千 里 外
 相 期 意 氣 兩 情 中
 些 回 攜 滿 天 香 袖
 和 氣 薰 為 萬 宇 風

（第 A. 2011 号 16b 枚目、第 VHv. 2155 号 13b 枚目）

琉球国使を送る

灼熱の太陽が足元を照らし
 南に広がる海と空は東方の海と空へとつながる
 山や川、そして風俗は違えども
 典礼や官吏の衣装には合い似たり
 千里を隔てた官吏同志が邂逅し
 契りを交わしていたかのように意気投合す
 帰途に就くにあたって天空の香りが身頃にも満ち
 風が一带を吹き抜けるように熱い思いが込み上げる。

21 グエン・ヴァン・キム（Nguyễn Văn Kim）『日本とアジア——社会経済の歴史的関係とその

18世紀に入ってレー・クイー・ドン (Lê Quý Đôn、黎貴敦、1726～1784) は、1760年に清朝に使者として渡った際に朝鮮と琉球の使者と会っている。『見聞小録』(図12)の中で、レー・クイー・ドンは琉球からの使者と二回会ったと述べている。一回目は、清朝の高宗の即位を祝賀するために、1738年にレー・フー・キエウ (Lê Hữu Kiếu、黎有橋) が中国に使者として渡り、そのことをレー・クイー・ドンが回想する場面である。その時琉球の使者が壁に書いた詩をレー・フー・キエウが読み「墨の筆跡も鮮やかで詩も称賛に値するほど軽妙である」と讃えている。

分 明 昨 夜 在 家 郷
 召 入 王 門 賜 酒 漿
 曉 角 忽 驚 人 好 夢
 醒 來 殘 月 照 東 廂

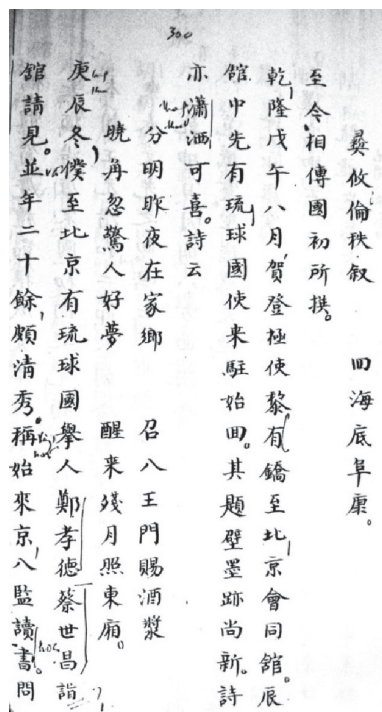


図12 『見聞小録』(図書番号: VHv.1382)

昨夜は確かに故郷の家にあったようだ
 王様に宮殿での酒席に招かれ
 早朝の水牛の鳴き声で夢から早く醒めてしまい
 気がつけば東の屋根を月光が照らしていた

(第VHv1322/1号、第4巻、29b枚目から30a枚目)

二回目は、レー・クイー・ドンが庚辰の年(1760)に清へ行ったことについて述べている部分である。科挙試験に合格した二人の琉球からの使者、つまり鄭孝徳と蔡世昌が謁見を求めて館にやってきた際にレー・クイー・ドンに会ったのである。

変遷』(国家大学出版会、2004年)。

- 22 レー・クイー・ドン (Lê Quý Đôn、黎貴敦、1726～1784) 『見聞小録』(社会科学出版、ハノイ、1997年、227頁)。レー・クイー・ドン (Lê Quý Đôn) はジエンハー (Diên Hà、現在のタイビン [Thái Bình] 省フンハー [Hung Hà] 郡ドックラップ [Độc Lập] 村) 郡ジエンハー (Diên Hà) 村出身。レー・ヒエン・トン (Lê Hiến Tông、黎顯宗) 王の時代の壬申の年(景興13年 [1752]) に第二甲の進士と殿試第二位に合格する。聡明博学の名声が高く、入侍陪従、禮部左侍郎、戸部左侍郎、都御史、父安協鎮といった朝廷の要職を歴任した。副使として清朝にも派遣された。著作多数(チン・カック・マン [Trịnh Khắc Mạnh] 氏の『ベトナムハンノム作家の假名と別名』[通信文化出版、2007年]を参照のこと)。

その時の歓談をレー・クイー・ドンは以下のように記している。

庚辰東僕至北京有琉球國舉人鄭孝徳、蔡世昌詣館請見並年二十餘、頗清秀稱始來京、入監讀書。問：到北幾年。曰：前年冬來。問：應舉北京否。曰：學成回國應試（第 VHv. 1322/1 号、29b 枚目から 30a 枚目）

庚辰の年に我々が北京を訪れた折、科挙試験に合格した二人の琉球からの使者、つまり鄭孝徳と蔡世昌が謁見を求めて館にやってきた。二人とも 20 歳ぐらいで秀麗な面立ちであった。国子監で学ぶため北京に来たばかりだと言う。「来てどのくらいたつのか？」と尋ねると「去年の春から」と答え、「北京で試験を受けるのか？」と尋ねると「勉強が終わったら帰国して試験を受ける」と答えた。

レー・クイー・ドンの使節団と日本の使者たちの連詩は『見聞小録』に記されていないが、中国に渡った我が国の使節団が各国の使者たちと邂逅したことは、外交活動の一部である。

ベトナムと日本の使者が出会ったことを記す資料が最近研究者たちによって発見された。グエン・ティン・トゥン (Nguyễn Thanh Tùng) は「18 世紀の越日外交関係に関する特別な資料」²³の中で、「探花」であるグエン・ファイ・オアイン (Nguyễn Huy Oánh、阮輝瑩) が 1766 年に正使として中国に行った際に詠んだ詩「饒日本使回程」を紹介している。この詩はグエン・ファイ・オアインが書いた『碩亭遺稿』(図 13) 中の「皇花贈答附録」(第 A. 3135 VHN 号) に収められている。この発見を通じて、グエン・ティン・トゥンは越日外交資料について大きな功績を残したと言える。

この卓越した詩をグエン・ティン・トゥンは次のように絶賛している。グエン・ファイ・オアインは日本の使者に詩を贈るため前述した日漢語彙表の中の単語をいくつか使用した。オアインが日本の使者と接する際に主体的にそれらの語を使ったということは、本業である外交活動に専念していることを示している。そして日本の使者の目線に立って民族の矜持や立場を称揚する意義も認められる。さらに、これは唐代の律詩に則った漢詩ではあるが、漢語と日本語を結合した詩でもあった。つまり音韻を踏んだ対句として読まれる詩であるが、語彙に染み込んでいる日本の思惟形態や日本語も理解する必要がある。またオアインは使節として国外へ出る前から日本の研究をしていた節がある。というのも、グエン近海の港で沈没した日本船から救出された日本人女性と彼の祖先が結婚しているからだ。そのようなことを心

23 グエン・ティン・トゥン (Nguyễn Thanh Tùng) 「18 世紀の越日外交関係に関する特別な資料」(『ハンノム雑誌』第 6 [85] 号、2007 年)。

に留めて日本の使者との外交業務をこなしていたのかもしれない。

19世紀に入ると、経済・文化・社会の状況が大きく変化していった。ミンマン (Minh Mạng)、ティエウチ (Thiệu Tri)、トゥドゥック (Tự Đức) といった各王朝の国王は、カトリックと西洋諸国との受け身な外交関係を結ぶことを禁止した。その結果、外国との通商関係にいくばくかの障害が生じた。しかしながら、16世紀から18世紀にかけての通商は堅調に発展していった。なぜなら阮朝には東南アジア近隣諸国との通商を拡大していこうという前提方針が実際にあったからである。ザーロン (Gia Long) 帝の時代になると、有能な職人に戦艦を造らせたり、海上を曳航する大型の銅製の船舶を铸造させた。タン・ヒー・ジュン (Thang Hy Dưng) は論文「人道・外交・貿易の関係性——清代に難破した中国船を救助した朝鮮・琉球・ベトナムを中心に」の中で「中国の領海で遭難しベトナムに漂着した船と船員をベトナム朝廷は人道的見地から救助したが、それを通商が拡大する機会と捉え、難破船を中国に送り帰すことを条件に、広東で交易ができるよう清朝に要求した²⁴⁾」と指摘している。

今回の一連の資料を収集している最中に、琉球の使者に贈ったりー・ヴァン・フック (Lý Văn Phúc、李文馥、1785～1849) の詩を発見した。これは台風で遭難した中

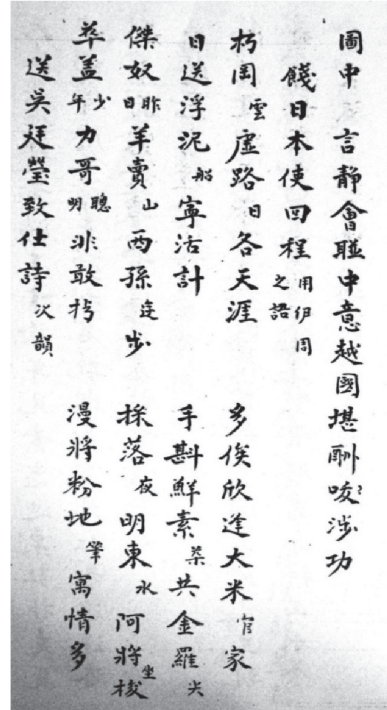


図13 『碩亭遺稿』(図書番号:A.373)

24 『タン・ヒー・ジュン (Thang Hy Dưng) 「人道・外交・貿易の関係性——清朝時代に難破した中国船を救助した朝鮮・琉球・ベトナムを中心に」(リー・ヴァン・フック [Lý Văn Phúc] とグエン・ティ ガン [Nguyễn Thị Ngân] の『西行見聞記録』に関する博士論文、ハンノム研究院、2009年、68頁)。

リー・ヴァン・フック (Lý Văn Phúc、李文馥、1785～1849) はヴィン・トゥアン (Vĩnh Thuận、現在のハノイ市タイホー [Tây Hồ] 郡郡ホーカウ [Hò Khẩu]) 村出身。ザーロン (Gia Long) 王の時代の己卯の年 (嘉隆 18年 [1819]) 郷試合格。礼部参知に昇進後、翰林院の編修 [訳者註：歴史書を編纂する官職] を務める。在任中に罪を犯したため東南アジア各国に効力 [訳者註：官職名のひとつで贖罪のために僻地に赴任させられる。勤務態度が良好であれば前職に復帰できる] として左遷され、海上で遭難した清朝の中国人を広東に送還する重責をまっとうした。この事件に関して『大南実録』には「レー・トゥアン・ティン (Le Thuan Tinh) 衛尉ら官吏を派遣したかどで免責されたリー・ヴァン・フックは、大型船トゥイロン (Thuy Long) に乗船して漂着した清国人を母国へ帰還させた」と記されている(『大南実録』第3集、138頁)。

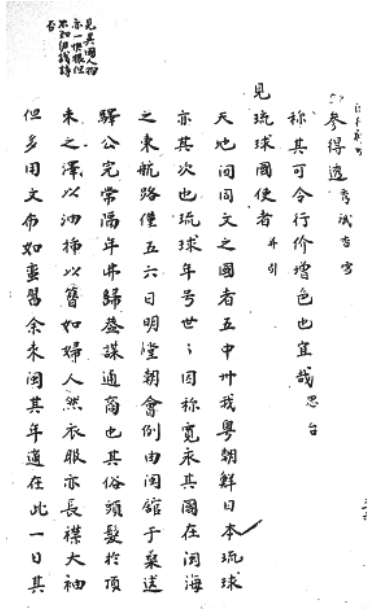


図14 『閩行雜詠草』(図書番号:A.1291)

国人を帰国させるために彼が1830年に広東の福建に行った際に詠んだ詩で、『閩行雜詠草』(図14)の中に収められた「見琉球國使者并引」と題されている。リー・ヴァン・フックが書いた部分を以下に引用する。

見琉球國使者并引

天地間同文之國者五，中州我粵朝鮮日本琉球亦其次野也。琉球年號世世因稱寬永。其國在閩海之東，航路僅五六日。明堂朝會例，由閩館于柔遠驛。公完常隔年弗歸，蓋謀通商也。其俗頭髮於頂速之澤以油，插以簪，如父婦人然衣服亦長襟大袖，但多用文布如蠻習。余來閩其年適在此一日其正使向姓，副使王姓來相訪。余聞之欣然出迎。筆談問字畫亦楷正，惟辭語頗澀，殊令人不甚暢。既揖別偶成一律

天地上において同文の国が五つある。それは中国・ベトナム・朝鮮・日本そして琉球である。琉球の年号は各代とも「寛永」というように記している。この国は閩海の東方にあり、船で行くと5、6日かかる。明堂にて朝会の慣例あり閩館から柔遠驛に入る。公務が完了しても帰国しないで、通常1年ほど滞在して通商の段取りをつける。琉球の使者は頭のとっぺんで髪を束ね上げ、鬢付け油を使い女性のように髪を簪でとめている。そして長い身頃、袖の太い衣服を身につけている。衣装には蛮人の風習にあるような文様が施されている。私が閩に来て1年余りたったある日、向という姓の正使と王という姓の副使が訪ねてきた。それを聞いて喜んで迎え入れた。筆談の最中はすべて楷書を使っていたが話し言葉は流暢とはいえず、双方の意思疎通は円滑にはいかなかった。見送るときに咄嗟に思いついて唐詩を作ってみた。

所見何如昔所聞
重洋夢醒各天雲
琉球使驛程由海
襟袖學儒飾用紋
最喜禮文同一脈
為憐筆墨遜三分
茫茫客旅誰相伴
半卷陳詩語夕曛

琉球とはどんな国だろう 以前耳にしたことはあったけれど
 なんと海上で夢から覚めるとあなたと一緒に天上にいるではないか
 琉球の使者もまた海を越えてやってこなければならぬ
 [琉球の使者の衣服は] 儒者の装束に文様が施され
 なにより嬉しいのは双方とも同文の国同士であって
 ただ残念なのは、筆と墨による筆談ゆえ三分ほどは話が隠れてしまい
 遠くからの旅客は誰と相伴すればいいのやら
 陳朝の詩が半巻さえあれば夕方まで語り合えるというのに
 (第 A. 1291、21B 枚目から 22a 枚目)

この詩とリー・ヴァン・フックの引用文は、琉球とベトナムの阮朝の外交関係を研究する際の資料になるばかりでなく、前述したように外交と交易が結合した人道という側面からもこれまでの研究者たちの考察を裏付けるものである。

20 世紀初めには東遊運動^{トンスー}を提唱したファン・ボイ・チャウが『琉球血涙新書』^{あら}を著わした。愛国者ファン・ボイ・チャウはベトナムを侵略するフランス植民地主義に反対するようベトナム民族に呼びかけたが、琉球の例からそのことを思い起こしてもらいたかったのがある。この点では琉球王国自体を考証することにはならないが、「琉球」という名を冠したタイトルは、ベトナムと日本の中の琉球という地域の長年にわたる関係性をまさに証明することになる。

最近になって研究者たちが公開した越日間の外交資料から、両国の関係はかなり早い時期に確立し何世紀にもわたって続いたことがわかる。琉球と日本はベトナムと恒常的に関係を持ち続け、良好な友好関係は双方の国民の努力によって今日まで続いているのである。

2. 通商や民間ベースの交流

2.1. ベトナムの中の日本人

16 世紀から 18 世紀にかけて、ベトナムと東アジア地域、その中でも特に日本との経済・通商関係は繁栄を極めた。首都地域が伝統的な各種手工業によって経済・通商面で発展するのに伴って、隣接する地域では、チュー・ダオ (Chu Đậu)、ホップ・レー (Hợp Lễ)、バツ・チャン (Bát Tràng) の陶器、バク・ニン (Bắc Ninh)、ハー・タイ (Hà Tây)、ハイ・ズオン (Hải Dương) の紡績、染色・土鍋・製皮などの職人たちが住むフォーヒエン (Phố Hiến) など、有名な手工芸を営む村が次々と生まれた。

それは15世紀から18世紀にかけてのベトナム製の陶器や焼物が、琉球・堺・長崎などで多数発掘されたこととも符合する。中南部のグエン氏や北部のチン氏を含む歴代の封建政権は、経済発展・政局安定・国防強化のために日本商船〔訳者註：朱印船を指す〕がベトナムに通商のために来航するのを奨励した。²⁵

なぜなら、日本の商人たちは王国を転覆させるような政略に加担することはせず通商活動にのみに専念したからである。²⁶『大南実録前編』にも「清朝・西洋・日本・ジャワの商人たちが大挙して来港したため、ドンフォー（Đông Phố、現在のザーディン〔Gia Định〕）界隈の風俗は中国化（文明化）された²⁷」と記されている。さらに中国や日本の商人たちは、ベトナムの封建的権力の後ろ盾もあってホイアンに中国人町・日本人町を作り、当時としては最も便利で名の通った国際的な港湾都市となった。

商談能力に長けた日本の商人たちが、ベトナムでの生活や仕事に溶け込んでいくうちに、日本の文化や言葉、そして日本人の誠実さが現地でも理解されるようになっていった。その結果ベトナム人や他の国々の人たちからも信頼され、仲買人としての仕事を任されるようになった。両国の関係をさらに良くするために日本の商人を養子に迎え入れるのを認める阮朝の王族まで現われた。グエン・フック・グエン（Nguyễn Phúc Nguyên、1613～1635）に至っては娘のゴックヴァン（Ngọc Vạn）を日本人の荒木宗太郎に嫁がせた。彼女が日本へ持参した鏡には「安南国鏡」の四文字が刻され、現在長崎の博物館に所蔵されている。²⁸

庚辰の年（1640）にノンヌオック（Non Nước）寺のホアギエム（Hoa Nghiêm）洞窟に建立された普陀山霊中佛（第2093、1263号）の碑には、ベトナム人女性が日本人と結婚した例が5組あると記されている。その他に前述したグエン・ファイ・オアインの祖先のように商船に乗っていた日本の女性が台風でベトナムに漂着しベトナム人男性と結婚した例や、リー・ティ・ヒエウ・ジエウ・クアン（Lý Thị Hiệu Diệu Quang）と名乗る日本の北部出身の女性が黎朝の武官と結婚し林寿候という爵位を受けて総兵使の職をまっとうした、とファン・ダイ・ゾアン（Phan Đại Doãn）教授が雑誌『昔日と今日』（第74号、2000年）に「ある日本とベトナムの家族」と題して紹介している。

両国の公的な関係はかつてのように堅調を保てたわけではないが、実り豊かな安南の大地と土地の人たちの厚い人情が在越日本人の琴線に触れ、帰国することなくベトナムの地にとどませたのである。幕府の要職にあった近藤正斉が1796年に編纂した『安南紀略稿』は作品として大変価値が高く、ベトナムと日本の文化交流

25 グエン・ヴァン・キム（Nguyễn Văn Kim）『日本とアジア——社会経済の歴史的関係とその変遷』134頁。

26 同上、132頁。

27 前掲書（注15）『大南実録』第1集、91頁。

28 グエン・ヴァン・キム、前掲書『日本とアジア』135頁。

の一つの表象と見ることができる。

2.2. 日本の中のベトナム人

ハンノム研究院に所蔵されているチュオン・ダン・クエ (Trung Dăng Quế、張登桂)²⁹ が1828年に著した『日本見聞録』(図15)(第A.1164 VHN号)は、ベトナム人が日本について書いた本の中では初期の部類に属すると考えられている。これはベトナム語に翻訳されて1990年の『ハンノム雑誌』第1号に掲載されている。『日本見聞録』は、嘉隆14年(1815)に暴風で日本に漂着し筏でフエに護送されて帰還した5名のベトナム兵の話のチュオン・ダン・クエ大臣がまとめたものである。兵士たちは日本に逗留している間に日本人の厚情に触れ、日本の暮らしぶりや風俗・習慣を実際に体験した。それを帰国してからチュオン・ダン・クエ大臣に報告したのである。

チュオン・ダン・クエは、5名の日本への行程を、暴風に巻き込まれた時点から日本の一地方で庶民に救助され帰国の方法を見つけるまで、当時の日本の生活や風俗・習慣を含めて、本人の文才や語り口も相俟って、極めて詳細かつ丹念に描写している。

例えば、日本人(容姿・服装)、行政制度(役職名・指示系統)、家屋、役所、軍事制度(式典・呼称の仕方・軍事設備・船舶・馬・武器・指示系統など)、都市の様子(商売・刑罰・葬祭・交際・飲食・お金・文字・外国との貿易など)、気候、農業(米・花卉)、宗教(道教・カトリック)といった生活が簡潔に活写されている。

チュオン・ダン・クエはこの書の中でベトナム人が音読した57語の日本語(おそらく5名のベトナム兵がクエに聞かせた語彙をもとにしている)を記している。例えば、「ショ(暑)」の意味での「アクチ(悪志)」、「ザー(家)」の意味での「デー(蝶)」、「ハン(寒)」の意味での「タービ(且為)」など。日本語はベトナム語とは違い膠着語なのでこれらの日本語の発音は正しいとは言えない。例えば「暑い」の意味の「アチ」は2音節しかないが本当は「アツイ」と3音節である。「デー」は1音節しかないが日本語では「イエ」と2音節である。しかしながら、この書に日本語語彙集が載っていると事実から、ベトナム兵たちが扶桑の国で暮らしに溶け込もうと

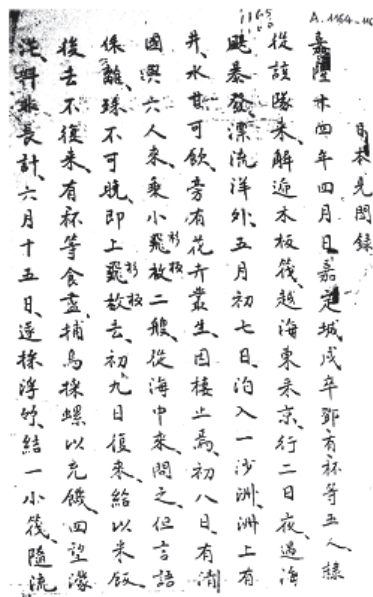


図15 『日本見聞録』(図書番号:A.1164)

29 チュオン・ダン・クエ (Trung Dăng Quế) は別名クアン・ケー (Quảng Khê)。19世紀の人物。1819年に郷試に合格後ティエウ・チ (Thiệu Trị) 王の教育係を務めた。ミン・マン (Minh Mạng) 帝の時代には会試の主査を何度も務めた。

日本語学習を意識的に行ったと読み取れるだろう。また、19世紀初頭の外国人がどのように日本語を読んでいたのかという資料にもなるであろう。

おわりに

越日関係に関する特徴を国内外の専門家たちによる研究や論文を通して整理してみると、越日間の経済文化交流はかなり早い時期から始まっており、16世紀から18世紀にかけて繁栄し、19世紀の一時期に中断したことがわかる。ベトナムと日本はその関係性に消長があったものの、地理的に近く、また歴史文化的に多くの共通点があるために、越日関係は何世紀にもまたがって続き著しい発展を遂げてきた。越日関係に関する資料は両国で保存されており、特に漢喃^{ハンナム}研究院で所蔵されている各資料はベトナムと日本の関係を研究する際に今後大いに寄与するであろうし、今世紀に両国の国民が友好協力関係を発展させる際の礎となると確信する³⁰。

30 本論の一部は沖縄大学で発表したものと『ハンナム通報』、『東アジアの文化と琉球・沖縄』彩流社、2010年が初出である。